

Ⅱ 発達とともに生ずる問題行動Ⅱ

幼稚園における

困る問題の発生と変化



藤村 美津

おかあさんがたと話している時「何か、困る問題はありませんか」と聞くのが、私のくせである。おかあさんがたは、はたと考え、そして、しゃべりはじめるのです。

「うちの子どもは、朝早くから幼稚園に行きたがって困ります」

「犬がきらいで、通園の途中でも、犬に出会うと、向うみずに走り出すので、困ります」

「近所におともだちがいるのに、その方と一しょに、幼稚園に行かなくて困ります」

「うちの子は、落着きがなく、フラフラしているので、幼稚園でも、先生がお困りだろうと思いますが——」といろんな困る問題がとび出してきます。しかし、これらの中には、本当に困る問題としてとり上げ、積極的に処理すべきことと、子どもの発達段階や生活のしかたなどからして、さほど、問題としてとり上げなくとも、子どもの成長や時間が解決してくれるものとあります。

「困る問題」というと、今まで私どもは、とかく、「困る子ども」とイクオールに考えがちでありました。そのために、問題を分析し解決していく努力が、問題児づくりになってしまうていたのです。しかし、よく考えてみると、困る問題も、そのとり上げかたにより、子どもの成長の役に立たせることができるようです。このマイナスと考えられている諸行動の興味こそ、幼児の特性といわれている未分化性が、分化しはじめた証拠です。そして、その分化の道すじを支えていくのが、教師の役割りの一つではないでしょうか。

☆

子どもたちが、園生活になれて、気がるに行動できるようになると、そろそろ自立ってくるのが「つげぐち」の問題です。

「つげぐち」とひとくちにいっても、いろいろな種類のつげぐちがあります。

「ノセテ、クレナイノ」「代ッテ、クレナイノ」

「借シテ、クレナイノ」という種類のもの。

「H子チャント、イジワルヨ」とひとりごとに近い種類のもの。

「XXチャン、ヘイニノボッタヨ」

「△△チャントチ、カクレンボデ、エンノシタニ、モグッタ

ヨ」という報告型

「M君タチ、ハケツ持ッテ、砂場ニイッタケト、水イタズラジヤナイ?」と、先まわりしてつげぐち

「先生、I君とN君、裏ノ石ントコテ、オシッコシテル」

とかけこんできたO夫 よく聞いてみると、さっき、自分もしたので、気がとがめているらしい

「キク組ノ Kチャン、サカノボリ、イケナイノニ、言ウコト

キカナイ」と自分たちはまもれるようになったきまりを、小さい組の子が侵しているのが気になる。年令のちがう子の問題。

「ツマンナイヨ、山チャン、トリコナノニ逃ゲチャウンダモン、先生、ドオスレハイイ?」 とルールをまもらないやまぐち

君への批判など。

これらいろいろなつげぐちを、私どもは、子どもの年令や生活

経験などにそくしてダイナミックに処理しなければなりません。

「子どものけんかに、おとなは出るな」の鉄則をまもって、いつも知らん顔をしていたらどうでしょう。

また、「そのことだったら、あの先生に、いってこらんさい」

「きく組の子」じゃ、きく組の先生に言ってあげなさい」と、先生が問題をたらい回しにしていることはないでしょうか。

「そう! 代ってくれないの、じゃ、いってあげよう」と髪を逆立てて出かけていくことはないでしょうか。

そうすることが、「適切な処理のしかた」の時もあります。でも、そうでない場合もあります。だから、ダイナミックな処理が必要になるのです。

「ツマンナイヨ山チャン、トリコナノニ、逃ゲチャウンダモン、先生、トオスレハイイ」

この発言があったのは、二年保育の5才児が、二学期をむかえた時でした。

4才の頃は「逃ゲチャウンダモン、僕ヤメタ」というのがほとんどでした。ですから遊びが継続せず、自分からその場を離れてしまうので、心の成長のチャンスにならなかつたのです。それが「ネエ、ミンナ、ツマンナイナ、ズルイヤツガイルト」という発言に変わってきたのですが、「ズルスルヤツ、ヤメロヨ」という結論になりがちでした。そこで「ずるずる人、やめさせちゃって

もいいけど、やめさせないで、ずるしくなる方法はないの？」ときいてみた

「ワカッタヨ、モウ、ニゲナイヨ」と、山ちゃんあつさり、かぶとをぬぐ。頭の中では大いにわかっていることが、いざ、遊びが負けはじめると、ルール違反になる。それが、先生のちよつとした助言で、わかってしまう。しかし、この「ちよつとした助言」があやしげである。ともだちの言うことは聞かないのに、先生が出向くとわかってしまう、という権威によりかかった生活態度は、幼児といえども許せない。そこで、この時期にこそ、あらゆるチャンスをとらえて、問題を子どもの生活の中に投げかけ、子どもたちが、自分たちの生活を通して、ものを考え、判断していくように、しむけることが、最も大切になる

☆

三学期 5才児は、遊びの中に不合理を発見すると、それについて話し合い、自分たちで解決しようとする態度が育ちはじめた。

「君のコマ、ココデシヨ？」

「チカウ、サツキ、6タツタカラ、コッチダヨ」「オカシイナ、6テ、ココタツタノニ」自分たちでつくったスゴロクのマス目が小さくて、コマの移動のさい、いつもコタゴタを起している。今までだったら「ツマンナイヤズルハカリシテ」とすぐやめ

てしまうのに、この頃はゴタゴタしながらも、おたがいに文句をいい合い、がまんし合って遊んでいる

「コノスゴロクノマル(マス目のこと)小サスキテ、トッチダツタカ、スグワカンナクナツチャウカラ、モウ少シ、大キイノニ、書き直サナイカ?」「ソウシヨウ、ソウシヨウ」ということで、遊びの途中でスゴロクの修正がはじまった。また、あそんでいる途中で順番がわからなくなった時も、「シャンケンシテ、モウ一度決メヨウ」という発言をとり入れて自分たちで解決していた。そのために、遊びが中断せず長続きしている

今日も庭の木にしがみついて「開戦トン」をしている子どもたちでも「トリコ」になって逃げ出すのはいない。最初から人数をかそえて、二組同数ではじめるルールもわかったらしい。片方が一人足りない時「トリコ」を一回だけ逃がしてやる知恵も出たようだ

幼稚園には、困る問題はいっぱいある。しかし、困るとは、誰れが困るのだろうか。最初に記したように、「困る問題」を幼稚園でも、家庭でも、おとなが押しつけてはいないだろうか。おかねの問題にしろ、あばれん坊の問題にしろ、成長に必要な一つのふしなのだ

その処理のしかたは、あくまで、子どもたちの生活の中で考えたものであり、子どもの成長に役だつものでありたい。